



図版1 「土片坏」の形態的変異

1 杯C I (平城宮 SK820 出土) 175.0 × 32.0mm

2 杯A III (同上) 168.5 × 34.0mm

3 皿A II (同上) 179.0 × 38.0mm

4 皿A II a (平城宮 SK219 出土) 175.0 × 35.0mm

5 皿A II c (同上) 177.0 × 33.0mm

* 2以外は未報告資料

奈良時代の「土片坏」は、少なくとも3つの考古学的器種に分類される。杯C I・杯A IIIそして皿A IIである。これらはもともと、皿A IIとして記載される浅形食器 (SK219:『平城報告II』) であったが、のちにこの三者が識別されるようになった (SK820:『平城報告VII』)。1・3の器種名は、実測原図の注記にしたがった。また4は、原報告では皿A II aとされたが、こんにちでは杯C Iに分類することが多い。5はいわゆるII群土器で、外面をヘラケズリで整えるもの。

筆者の計量的研究によれば、土片坏は天平頃から宝亀年間にかけて縮小傾向にある。また宝亀4年1月の告朔解案において、「土片坏」はにわかに「土枚坏」へと書き換えられる (Ⅱ章11節) が、法量変化との関係はわからない。

森川 実「片塊から片坏へ」『奈文研論叢』2号、2021年。

図版2 「麦」字墨書須恵器



図版2 「麦」字墨書須恵器

- | | |
|-------------------------|----------------|
| 1 「麦 坯」 (平城宮 SD8600 出土) | 173.0 × 36.5mm |
| 2 「麦 子」 (平城宮 SD1250 出土) | 173.0 × 62.0mm |
| 3 「麦」 (平城宮 SA109 北溝出土) | 181.0 × 56.0mm |
| 4 「麦」 (二条大路 SD5100 出土) | 210.0 × 75.0mm |
| 5 「麦／水」 (平城宮 SD2700 出土) | |

天平宝字2年（758）におこなわれた御願経書写のとき、経師らの食器として、7月24日付で麦塼・羹坏・饗坏・片盤の四器が請求された。平城宮・京で出土する「麦」字墨書須恵器（上段）は杯B Iで、この麦塼にあたるとみられる。ただし、麦塼はこのとき下充されず、水塼ほかで代用されたことが知られている。2・3が4よりひと回り小さいのは、時代が少し降るためか。

下段は杯蓋の頂部にまず「水」と書き、その文字が薄れてから「麦」字を上書きしたもの。全形はわからないが、杯B Iの蓋であろう。本例は水塼と麦塼とが実用時に混同されていたことを示しており、御願経書写のとき、麦塼の代わりに水塼が支給された事實を思わせる。



図版3 須恵器の食膳具

1 陶 垢 (須恵器杯A I -1) 194.0 × 56.0mm

2 陶片 垢 (同 杯A I -2) 199.0 × 42.0mm

3 羹 垢 (同 杯A III) 155.0 × 43.5mm

4 饉 垢 (同 杯A IV) 116.5 × 35.0mm

5 陶 盤 (同 皿C I) 247.0 × 32.0mm

(1～4: 平城宮 SK820、5: 二条大路 SD5100 出土)

二部大般若経書写（天平宝字6・7年）のときに用いられた須恵器食膳具を念頭におき、無台食器で五器構成を再現した。ここで食器構成の再現に用いたのは平城宮SK820および二条大路SD5100出土の須恵器食器で、天平中頃から末年にかけてのもの。天平宝字年間の土器群には須恵器食器が少ないため、やむなくこれらを用いたが、まったく同時代の新資料によって今後再撮できることを期待したい。

図版4 土師器の食膳具



図版4 土師器の食膳具

1 片 壺 (土師器杯A I) 194.0 × 51.0mm

2 片 壺 (同 皿A II) 175.0 × 35.0mm

3 窪 壺 (同 梗A I) 137.0 × 40.5mm

4 片 盤 (同 皿A I) 219.0 × 32.0mm

(平城宮 SK219 出土)

宝龜年間の奉写一切経所で用いられた土師器食膳具を念頭におき、四器構成を再現した。器形と法量が大きく異なるため、これら四器は識別が容易で、考古学的器種とも大きな齟齬はない。ただし、考古学上の「杯」は古代の壺と壺とにわかれ、また「皿」のなかには本書で片壺（枚壺）に対比した浅形食器が含まれる。